

第19回「万葉集を楽しむ会@花奈雅和」報告書

令和5年4月19日にリアル12名、他教室など3名あわせて15名のもとで開かれました。今回の題花の「ニワウメ」はほとんどの参加者が知らない花でした。万葉の時代には唐棣(はねず)と呼ばれており梅でも桃でも桜でもない灌木です。植物学的に一番近いのはユスラウメだそうです。



ニワウメ



ユスラウメ



木の花には珍しく花卉の間があいている

「はねず」は色の名でもあり飛鳥、奈良時代には皇族の色だったそうです。聖徳太子の「冠位十二階」(冠の色で階級を表した)、天武天皇の服(袍)の色によって階級を決めた「六十階服飾」、そして律令の官位と当色(とうじき)の変遷についても教えていただきました。「はねず色(ニワウメの色)」はベニバナとクちなシで染められますがオレンジ系から薄紅系と色の幅があります。それは同じレシビでも草木の状態や染色の環境によって色が変わってくるからだそうです。天皇しか着られない絶対禁色(きんじき)の黄棣染(こうろぜん)や皇太子の黄丹(おうに)を色見本で見た後、バリエーションの例も確かめました。

はねず(ニワウメ)の歌は万葉集では4首詠まれていて、今回は揺れ動く恋心をはねずの移ろいやすい色に込めた大伴坂上女郎の歌とはねずの花が雨で色あせてしまうのではないかと憂う大伴家持の歌を教えてくださいました。万葉集の編纂者である家持の歌の師が叔母であり姑でもある郎女であること、藤原氏が台頭し、家持は地方生活を余儀なくされ、大伴氏は衰退、最後は多賀城(仙台)で死んだこと、そして、万葉集最後の歌(「新しき年の初めの〜」)を詠ってから26年間も歌を詠っていないことも教えていただきました。坂上郎女は先生のお好きな歌人のひとりでもあります。いつものように皆で唱和して調べを楽しみました。



今回の先生の着物は黄丹色で地模様は平安貴族と優雅です。はねず色の帯にはオシドリがあしらわれています。帯留はザクロ。はねずにはザクロの説もあるがこれは間違い。ザクロが好きな先生の「洒落っ気」。

令和5年4月29日 文責：三浦美智子・高木紀世子

次回(第二十回)「万葉集を楽しむ会@花奈雅和」のお知らせ

令和5年6月21日(水) 10:00 ~ 12:00 プララ杉田505号室

参加費 1,500円 ◎参加申し込み mondlicht.y.20@gmail.com (長谷川嘉子)

5日前からのキャンセルは参加費をいただくのでよろしくお願いたします (資料は後日お渡しいたします)

◎6月21日に都合の悪い方は講師に直接ご連絡ください paksara3t@gmail.com (cc 長谷川)